

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版



小説 斐芝嘉和

挿絵 天道まさえ

第一章	くノ一・紗耶香	006
第二章	コードネームK	028
第三章	天神衆	036
第四章	絡みつく毘	045
第五章	襲撃	077
第六章	淫戯室	093
第七章	猥姦	140
第八章	暴露・白濁	183
エピローグ		251

登場人物紹介

C h a r a c t e r s



きりの さやか 霧野 紗耶香

無想流忍術伝承者。フリーの企業忍者。日常では、保育園の先生として一般的な生活を暮らしている。

おくでら かおる 奥寺 肇

紗耶香が勤める保育園の園長。

つやま てんじん 津山 展仁

企業忍者集団・天神衆を率いる傭兵。

「このアマッ！」

思わぬ反撃に腹を立てた男が、鉄鉾の生えた拳を突き込んできた。プロテクトギア胸部のサーボモーターが火を吹いているから、動きは鈍い。が、うしろ手に縛られているために払い除けることはできず、バク転して避ける紗耶香。同時に脚を鋭く跳ね上げ、

ガキッ！

爪先で男の顎を蹴り上げた。これ以上はないタイミングで決まったカウンターヒットに、装備も含めて百キロ近い男の身体がふわっと浮き上がる。

「く……っ！」

反撃を成功させた女忍者の口から、小さな呻き声が漏れた。激しい運動にレオタードが振れ、太腿のつけ根が締めつけられたのだ。

ギュチ、ギュチ、と感じやすい割れ目に喰い込んでくる薄布。波打つ布地にクリトリスが甘噛みされ、しごかれた肉畝に微弱電流が湧く。重々しく揺れる乳房も密着した薄布に愛撫され、肉釣鐘全体がじわっと熱を帯びる。

（あっ！ しまった……！）

恥ずかしい感覚に一瞬、身体が竦んでしまった。アドレナリンによって加速した知覚が四方八方から飛んでくる拳足を察知しているのに、反応がコンマ数秒遅れる。

ザッ！

着地しかけていた脚が刈るように蹴られ、同時に背を殴られてバランスが崩れた。俯せに倒れそうになる身体。鼻先が硬い床に触れる寸前、したたかに蹴りつけられる脇腹。

機械によって強化された蹴りだ。紗耶香の細い身体はくの字に折れ曲がり、ボールのように転がって壁まで吹っ飛ぶ。

「ウグッ！」

衝撃に息が止まった。ズッシリと重い痛みが脇腹に残り、身体を伸ばすことすらできない。

「大した女だ。クスリが回ってるだろうに、まだ動けるのか？」

軽い脳震盪を起こして朦朧とした頭に、クスリ、という単語がこだました。失神している間に注射されたのか？ いや、それならもつと効いているはず。

ふっと、なんの脈絡もなく指の腹に蘇る小さな痛み。

カプセルの開閉ハンドルだと思つて握つたあの把手——アレに、クスリを塗つた針が仕込んであったのだ。適切な量を注射できないから、効きは弱い。だが筋電位は乱れ、レオタードが異常反応している。繊維式筋力サポートシステムを推測しての罠だったのか。

（なんて底意地の悪い……！）

捕えたネズミを遊ぶ猫のように、反撃できる余裕を敢えて与えて、いたぶり続けるつもりなのだろう。実際、仲間がひとり倒されたというのに、ほかの男たちはニヤニヤと笑い

ながら、呻く女忍者をゆっくりと取り囲む。

「どうした？　もうおしまいか？　せつかく褒めてやったのに」

ゆっくりと近づいてきた男が紗耶香の足首を掴み、踵から生えたナイフを抓んだ。

シュッ：バサッ！

凶器は、壁際に片づけられた棚の山へと投げ捨てられた。

「洋上に出てからじっくり遊んでやるつもりだったのに、期待はずれだな」

洋上——紗耶香の顔がハッと強張る。

出港は明日。陸から何千キロも離れたら、忍術を使っても生還できない。

「チィッ！」

全身をバネにして跳ね起きたものの、異常反応するレオタードに全身を締めつけられ、動きが鈍った。頭突きは軽くかわされ、連続して放った回し蹴りもあつさり避けられる。無防備な軸足が刈られ、俯せに倒れてしまう。

「くふっ!？」

ムギユッ！

胸と床に挟まれ、忍装束の中で潰れる乳房。皮下電位に反応する薄布が伸縮し、締めつけられ揉みまくられる双球。捲れ返る胴衣の裾下、黒いスパッツに包まれた美尻も、細かく震えるレオタードに愛撫されてしまう。

（くうっ！ こんなときに……ッ！）

胸と尻に、淡い快感が湧き上がった。クスリのせいで神経感度が高まっているらしい。焦る理性を無視して悦びが広がり、手足から力が抜けていく。

「だらしないな、もうダウンか？」

大きな手が、肩に乗せられた。

「さ、触るなッ！」

身体を捻って逃れようとしたのに、全身に貼りついた薄布が逆方向に縋れ、動きが鈍る。無理に動かそうとすれば振れたレオタードが秘部に喰い込み、肉畝を揉み込まれる。身体の下では潰れた乳房がムギムギ歪み、擦れ合う乳谷に甘い痺れが湧き上がる。

「本気を出せよ。愉しめないだろう？」

「くっ!? あっ！」

無防備な尻を撫で上げられた。遠慮ない手つきに、紗耶香の顔がパッと赤らむ。

（く、そお！ こんな連中に……!）

普段の状態で一对一で戦えば、楽勝とまでは言わないが敵わぬ相手ではない。なのに、あの針のせいで……まんまと罌にはめられたことが悔しい。これまであまりにも簡単にコトが進みすぎていたので気が弛んでいた。反省してもどうにもならないが、少しも疑わなかった自分の間抜けさが腹立たしい。

「どうした？ 鳴かないのか？」

尻を撫でているのとは別の男が頭の先に跪き、紗耶香のポニーテールを掴んだ。グイッと引っ張られ、無理矢理上げさせられる顔。声など上げるものか、と唇を噛み、切れ長の瞳を怒らせて睨み上げると、男のいやらしい笑みが深まる。

「おや？ 顔が真っ赤じゃないか。尻を撫でられただけで気持ちよくなったのか？」

「く……ッ！」

羞恥心を刺激して心を折る手管だ——分かっていのに、顔がカァッと熱くなる。大きな手でゆっくりと撫で回されている尻は、確かにじんわり気持ちよくなっていたのだ。

（クスリのせいよ、羞じらうことなんて、ない！）

震える心に言い聞かせているのに。

「いやらしい女だな。ノーパンじゃねえか」

「こんな卑猥な格好で乗り込んでくるとは、レイプ願望でもあるのか？」

「ち、違うッ！」

下着を着けていないのは、筋電位に反応する繊維式筋力サポートシステムを正常に機能させるため。それは男たちも分かっているはず。女忍者を恥ずかしがらせるため、とぼけているのだろう。

「そんなこと言って、本当はこういうのが好きなんだろう？」

ムギユ、ムギユ、ムギユ。

円を描くように動く手の先で武骨な指がシャクトリムシのように動き、揉み込まれる尻肉。ミニスカート状に腰を包んだ胴衣の裾の上からなのに、喰い込む指先は力強く、桃尻の芯まで捏ね回されてしまう。指の動きに合わせてレオタードが振れ、張り詰めた薄布に締め上げられ、擦り上げられる秘裂。

（ううっ!? くそ、レオタードが、勝手に……）

繊細な肉畝が、震えながら伸縮する薄布に揉みまくられる。乾いた手を被せられ、しごくようにマッサージされているような——左右からの圧力に割れ目が寄せ合わされ、感じやすい媚肉が擦れ合う。湧き上がる悦びは、現象としては神経電位の変化。筋力サポート繊維が反応し、引っ張られる以上の複雑な動きで秘部を愛撫されてしまう。

「ふ……く、うう……」

太腿のつけ根に甘い感覚が溢れてきた。揉みくちやにされた肉アケビが微熱を帯び、秘裂の内側が潤んでくる。痛みであれば鍛えた精神力でこらえることができるが、快感は難しい。羞じけや理性を無視し、淫らに反応してしまう女の身体。

（だ、ダメ……気づかれたら……っ！）

感じていることを知られたら、男たちは嵩にかかって責めてくるだろう。これ以上の恥辱を避けるため、紗耶香は懸命に唇を噛み、声をこらえた。

だが、そんなことをしても無駄だ。

きつく閉じ合わされて擦れ合う、網タイツ風の薄布に包まれた伸びやかな太腿。網目に透けて見える柔肌は瑞々しく、艶めかしい輝きで男たちの視線を惹きつける。

男の指に引つ張られてズレ動く胴衣の裾下には、漆黒のスパッツに締めつけられた美尻の端が見え隠れしていた。揉み込みに合わせて柔らかく歪む、桃の実のような丸み。黒い薄布があまりにもピッタリと貼りついているため、ほとんど裸と変わらない。

折り重なったスマートな脚を摺り合わせ、腰をくねらせて呻く女忍者の姿に、男たちの目がギラギラと輝き始めた。

「揉み甲斐がありそうなケツだな。俺にもやらせろ」

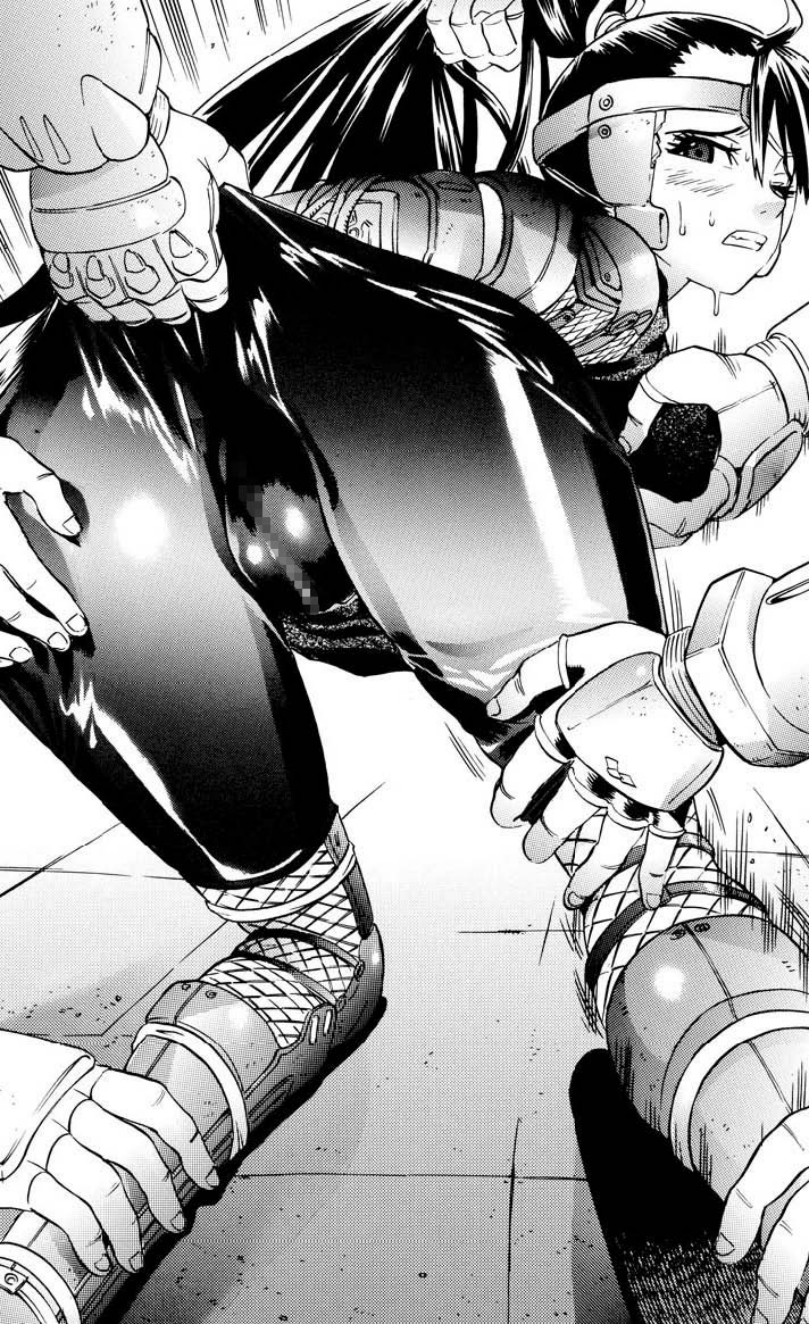
ひとりが身を乗り出すと、ほかの者たちも競うように手を伸ばす。

「くっ!? あ……うっ!」

ミニスカートのように被っていた胴衣の裾が捲り上げられ、漆黒のスパッツが露わになった。クッキリと浮き上がる尻割れに無数の指が殺到し、左右の尻房がムニムニと揉みまくられる。桃尻にありつけなかった武骨な指は太腿に群がり、拒むように閉じ合わされた内腿を搔き分け、秘部の傍でモゾモゾ動く。

ギユ、ギユ、ギユ……骨まで届く容赦のない圧力。

「は、離せっ! このっ!」



言いながら、津山が取り出したのは大小のゴムボールをくつつけて作ったような棒状の物体——異様な形をしたバイブレーター。並の男根よりは明らかに太くて長い淫具は、赤らんだ肉アケビに擦りつけられる。

ぐちゅ、ぬちゅ、ぐちゅっ！

「あう、あう、ンうンッ!？」

敏感な肉ビラがコブコブした硬さに揉みくちやにされ、秘裂に湧き上がる快感。頭の中に桃色の靄が噴き出し、意識が蕩けそうになった。

「答える。だれに調教された？」

低く粘り着く声が、頭の中に染み渡る。

（いけない、聞いては、ダメ……）

懸命に言い聞かせるのに、催眠術師の声は羞恥と淫悦に揺れる心になつとりと絡みついていた。太い指に割り開かれた括約筋に悦びが湧き上がり、白濁液を噴きこぼす肉華は卑猥な玩具を擦りつけられて淫らに疼く。

「お前の尻孔をこんなに広げたのは、だれのペニスだ？ さあ、正直に言え」

言葉を重ねられると、もう逆らえない。

「ち、父、に……」

こぼれ出す秘密。奥寺がハッと息を呑む気配に、心がひび割れる。

（違います、違うんです、園長！ アレは決していやらしいことではなく、予防的訓練と必要な……）

頭の中で言訳の言葉が渦巻くが、蕩けた舌が紡ぎ出すのは甘ったるい繰り言だった。

「父様に……父様が、私の、尻を……」

「実の父親に犯されたのか？ フェラやオナニーはどうだ？ 処女はだれに捧げた？」

「とう、さま……全部、父様に……父様しかない、私には、父様しかあ……」

必死に嚙もうとしている口が催眠術によってこじ開けられ、舌っ足らずな言葉が止まらない。まるでかつての悦びを反芻し、恍惚としてしまったような媚声。恥ずかしさに顔が熱くなる。心臓が早鐘を打ち、精液に濡れた柔肌に香汗が滲んだ。

「聞きましたか、園長？ この女は、実の父親といやらしい行為をしていたのですよ。禽獣にも悖る鬼畜の所業だとは思いませんか？」

「そ、それは……」

奥寺の声が弱々しく震え、掠れて消えた。紗耶香を信じたい、助けたい、と思いつつ、常識的な倫理観から湧き上がる嫌悪の感情を抑えられないでいるのだ。

「だって紗耶香先生は、忍者で……だから……」

「そう、忍者なのです。おぞましく汚らわしいくノ一なのですよ」

一気に畳みかけた津山が、犬精液に濡れた淫具を紗耶香の股間から引き離れた。ツウツ

と糸を引く青臭い粘液。肛門を弄っていた指も引き抜かれ、ポツカリと口を開ける排泄孔。執拗な愛撫に括約筋が蕩けきり、閉じることを忘れてしまったようだ。

そこへ——ぬちよ！

「くうあっ!?」

生温かな粘液に濡れたゴムボールが、無防備に開いた菊膜に押しつけられた。ぬめりを擦りつけられた肛門に甘い気持ちちが湧き上がり、心地よい痺れが腹の奥底まで響く。

「な……なにしてるんだ!? や、やめろ、やめてくれ!」

「園長が諦められるよう、この女がどんなにいやらしいかお見せしましょう」

焦る奥寺に笑いかけた津山は、精液まみれの淫棒に捻りを加えながら圧力をかける。

グググ……グポッ!

最初の珠が尻孔をこじ開け、排泄器官に潜り込んだ。しごかれた菊膜がカァッと熱くなり、押し広げられた括約筋に微弱電流が駆け巡る。

(だ、ダメ……気持ちよくなっちゃ、ダメ……)

この太い物体は尻孔にねじ込まれているのだ、奥寺の前で己の淫らさを証明されてしまふのだ——理性の欠片が悲鳴を上げているのに、肛悦に酔った身体は凶悪な形状を悦び、激感の予感に胸が高鳴ってしまった。犬ペニスの余韻が残る膣奥がジクジクと疼き、こちらの穴へ挿入て、とばかりに濃密な愛液を噴きこぼす。

「ごらんさい。こんなに太い玩具が、こんなに簡単に呑み込まれていく」

嘲笑う声に合わせ、ゴムボールの連なりが捻られた。

ぐぐ、にゅちゅ、グリリっ！

ぬめる弾力にこじ開けられ、しごき立てられる排泄粘膜。尻孔がジリジリ灼け、薄布に締めつけられた桃尻に甘い痺れが染み渡る。

（うう、イヤ……お尻なのに、お尻なのにいいっ！）

ムコ、モコ、と潜り込んでくるゴムボールが、気持ちいい。先に流れ込み、腸粘膜に広がって細かく震えていた犬精液によつて、肉穴が淫らな器官に作り替えられていたのだ。淫具に揉まれた場所がたちまち気持ちよくなり、マッサージを受けた平滑筋に甘い痺れが充満する。腹の中に凶悪な淫具が満ちるにつれ、腰から力が抜けてしまう。

裏側から圧された膣穴にも、淫らかな悦びが広がっていた。淫具の太さに押し潰されて肉洞が歪み、精液まみれになったヒダヒダが擦れ合うのだ。剛直を欲してジクジク疼く粘膜を、小さな筆で弄られ、焦らされているような――。

「はう、ンう、ああ……」

ひとつ、またひとつ、とゴムボールがねじ込まれるたび、走り抜ける肛悦と湧き上がるもどかしさ。テーパーに突っ伏した伸びやかな女体が妖しくうねり、胸の下で潰れた乳房が香汗に濡れた乳肌を摺り合わせ、ムチュ、ニチュ、と鳴った。芯まで揉み歪められた肉

釣鐘に淫熱が蓄積し、冷たいガラスに捏ね回された乳首には稲光が弾け、イヤだ、恥ずかしい、という思いが突き崩されていく。

「ふあ……くう、ううう……ッ！」

ズズンッ！

腹の奥底に感じる硬さ。緩く捻れた直腸を矯正しながらねじ込まれた淫具の先が、関所のように狭まったS字結腸の口にまで達したのだ。

「ほうら、すっかり入ってしまった」

津山の得意げな声が、とても遠くから聞こえる。

尻孔に発した甘い痺れが背骨を伝って全身に広がり、意識も思考も掠れていく。ガラステーパーに擦りつけた顔は羞恥と肛悦に茹だり、熟れ柿のように赤らんでいた。淫具をねじ込まれた美尻が持ち上がり、居並ぶ男たちを誘うように右へ左へ打ち振られる。

恥ずかしい、とは思うのに、やめられない。

身体がくねるたび、身体のあちこちからヌチャ、ネチヨ、といやらしい音が立つ。精液に濡れたレオタードが伸縮し、四肢や柔肌が揉み回された。生温かなぬめりに愛撫された全身が心地よく蕩けていく。胸とテーパーの間では香汗に蒸れて桜色に茹だった乳房が柔らかく潰れ、硬い冷たさに捏ね回されて、悦びの塊に変わっていく。

いけない、こんなことをしている場合ではない——わずかに残った理性の欠片が懸命に

抗っているのに、身体はもう淫悦の虜になっていた。わななく唇から悩ましい吐息をこぼしてガラスの天板を白く曇らせつつ、桃尻を振り立てて悶える紗耶香。

「は……入ったって、入っただけじゃないか！」

涙声になった奥寺はなおも必死に庇ってくれているが、その声さえ遠い。

「アナタも強情なヒトだ。そろそろ分かっていただきたいのですがね」

苦笑した津山が淫具から伸びるコードを掴み、おもむろにスイッチを入れた。

ヴン！ ヴヴヴヴヴヴンッ！！

尻の中に炸裂する激震。

「うああっ!? あああっ! あうああああああああっ!!」

真っ赤に染まった顔を跳ね上げた紗耶香は、ポニーテールを振り乱して狂ったように身を振った。精液と愛液に濡れた膣襞が、粘膜隔壁の裏側から揉みくちやにされて擦れ合い、激感が次々と炸裂する。弾かれて反り返る伸びやかな背を凄まじい肛悦が何度も何度も走り抜けた。掲げた美尻を振り回し、振動玩具から逃れようと必死に藻掻く。

「やうっ! ああ、ううくううっ!」

おかしくなりそうな焦れっさに、身体が翻った。テーブルに背を預け、座り込む紗耶香。尻が滑り、茹だったように紅い肉アケビが前へ迫り出す。膝を曲げた伸びやかな脚は左右に広がり、薄布の穴から瑞々しい柔肌を覗かせた太腿が艶めかしいM字を描く。

おしめを換えてもらう赤ん坊のような恥ずかしいポーズ。だが、羞じらっている余裕はない。片方の手で白濁液にぬめる胸の双球を揺さぶり、ウズウズする乳首を甘噛みしつつ股間に手を伸ばして淫核を——キュッ！

ピキイン！

小指の先にも満たないほどの肉豆に、凄まじい電撃が弾けた。

バネ仕掛けのように反り返る身体。真っ白に灼き尽くされる意識。

尻孔が窄まり、直腸が捻れて、蠢くゴムボールをよりハッキリと感じてしまった。

「きあひいいい……！ ひう、ひう、ひううう……ッ！」

これではダメだ、余計に昂ってしまうだけだ——追い詰められた紗耶香は、自らの手で押し上げた乳房にむしゃぶりついた。春先の木の芽のように膨れた乳首を甘噛みすると、熱い突風が身体の中を吹き抜ける。

舌に感じる苦しょっぱい味は、肉突起に絡みついていた犬精液。おぞましい、と思ったのは一瞬だけで、味蕾に染み込む牡エキスに脳髓が痺れ、淫女のような振る舞いを止められなくなった。

もどかしい感覚は、太腿のつけ根にもある。小刻みに突き揺すられた蜜壺から溢れ出す精液が、超音波に操られ、繊細な粘膜花卉の中でミミズの群のようにモゾモゾ動き回っているのだ。



「へへ。中はもう、トロトロじゃねえか！」

心地よさそうに顔を赤らめた男が、震える桃尻をガッチリ掴み、グポ、グポ、と尻孔を鳴らしながら腰を進めた。

「んひあっ!? ひ、きああっ!?」

熱い津波が背を走り抜け、思わずペニスを吐き出して反り返ってしまった。開ききった唇からこぼれ出す、甘い吐息と大量の涎。

「コラッ! 津山様のありがたい御肉棒から口を離すとは何事だ!」

軽く叩かれた頭に電気が走る。

「ケツの孔が気持ちよくって、おかしくなっちゃったんだよなあ」

ゆさゆさと揺さぶられた乳房の芯には沸騰した溶岩が膨れ上がった。凄まじい肛悦が捻れる身体の内側に飛び火し、全身の感度が高まってしまったのだ。香汗と精液に濡れ、艶めかしく赤らんだ柔肌に、微弱電流がピリピリ走り回る。

汗を滲ませてゆさゆさ揺れる乳房は穴だらけのレオタードに揉みくちやにされ、淫熱に炙られた乳首が痛いほど張り詰める。うしろから押し潰された膣はブポッ! ブポッ! と卑猥に鳴り、牝香をたっぷりと含んだ牝汁を噴きこぼした。

「そんなにケツが気持ちいいなら、こうしてやろう」

「ひあっ!」

うしろから掴まれたポニーテールに、爆発する快感。

あまりに昂りすぎたため、髪の一筋一筋までがピンピン感じてしまう。

（あう……ダメ、イヤ、おかしく、な、るうっ！）

髪を引っ張られて弓なりに反り返った女忍者は、尻孔を犯した男に導かれ、ヨロヨロと後退った。男が腰を引き、床に仰向けに横たわると——ズズンッ！

「めひいっ!?」

屹立した男根の上に尻が落ち、奥底まで貫かれた。脳天を突き抜けていく稲光。しごかれた菊膜がカァッと燃え、背筋を走る電撃に反り返った身体が激しく捻れた。穴だらけの薄布に包まれた乳房が奔放に跳ね踊り、潤んだ乳谷を摺り合わせて、爆発する肉悦。

「ふあ、ふ、く、ううう……っ！」

煮え返る乳房を抱えて呻くと、剛直に挟られた尻孔がズクン、ズクン、と拍動する。火傷しそうに熱い男根はあまりに太く、わずかに身じろぎするだけで直腸がしごき立てられ、電気が走る。蜜壺の奥で細かな粘膜襞が奮い立ち、溝という溝に生温かな粘液が充満する。淫らに咲きこぼれ、甘酸っぱい牝香を漂わせる淫香の縁では、剥き身のクリトリスがミチチ、メキキッと肉を軋ませながら勃起した。

（か、感じ、ちゃううう……お尻なんかで、こんなに……うううっ！）

太さに押し広げられた括約筋が心地よく痺れ、淫茎にしごかれた直腸粘膜には小さなス

パークがパチパチと弾けていた。たくましい亀頭に突き上げられた奥底は電流が渦巻き、ジツとしていることができない。

「く、は……ううっ！」

肛悦に追い立てられた女体が、勝手に上下に跳ね始めた。

ぐぼぼっ！　ぐぼぼっ！

男根を呑み込んだ尻孔が卑猥な音を立てて捲れ返る。

（お尻なのに、お尻、なのにいつ！　どうしてこんなに、気持ち、イイ、のおっ!?）

動けば動くほど熱い電流が次々と湧き、艶めかしく悶える背を駆け抜けて頭の中が真っ白になる。ゆさゆさ揺れる乳房は自らの重みに捻れて柔肉の芯まで揉み捏ねられ、穴だらけの薄布に激しく愛撫されてさらに熱く煮え滾った。

「おおっ！　よく練り込まれたヌルヌルが、チンポに絡みついてくる！」

男の声が剛直を伝い、密着した排泄粘膜に響く。

小刻みな振動に菊膜が揉み立てられ、尻の真ん中に熱い感覚が炸裂。

「くあうっ！」

掠れた悲鳴を上げて身を振ると、グリリ、グポポ、と出入りする肉棒がいままでとは微妙に異なる場所に擦れ、新たな電撃が弾けた。反り返った身体が跳ね踊り、乳房を振り立てて捻れ悶える。

「なんてはしたない声だ。園長がびっくりしているぞ」

下忍の声も、もはや聞こえない。

（お、お尻がああ……お尻がああっ！）

次々と弾ける激感に追い立てられ、荒馬の背に跨っているように跳ねまくる。

「なんだ？ 尻でイッちまうのか？ まだ早いぞ」

グリリッ！

頬に擦りつけられる熱い肉塊——ペニスだ。

「ン、ああっ！」

犯された肛門と擦りつけられた頬の間に心地よい電流が往復し、身体がビクビク痙攣した。鼻を突く精臭に頭が痺れ、羞恥心が霞んでいく。先ほどまでフェラチオしていた口には牡肉の感触が鮮明に蘇り、焦れた唇が勝手に開いて舌が伸びてしまう。

欲しい、欲しい、欲しい——啜えたい、しゃぶりたい、舐め回したい——たくましい男根を啜えようとして身体が捻れ、口を大きく開けて迫る。

「そんなにコレが欲しいのか？」

意地悪く笑った男がスッと腰を引き、嘲笑いを残して遠離る。

（い、意地悪うっ！ 意地悪うっ！）

男の腰を跨いで肛悦によがる紗耶香の周囲には、赤黒く照り光る肉棒が何本も屹立して

いた。だが、啞えようとして顔を向けても、すぐに逃げられてしまう。

ズズズッ！　ズズン！　ズズズンッ！！

ペニスを追って身を振るたび、貫かれた尻孔が剛直にしごき立てられ、凄まじい電流が湧き上がった。裏側から捏ね潰された膣穴は蜜まみれのヒダヒダを摺り合わせ、こらえがたい疼きをさらに溜める。

（挿入て、お願い挿入て……これ以上、焦らさないでっ！）

おかしくなりそうなほどのもどかしさ。

傍に奥寺がいることなど、完全に忘れてしまった。

「し……してっ！　お願い、挿入てえええっ！」

込み上げてくる焦れっさに突き動かされ、淫らかな言葉を口走る。肉棒に貫かれた尻を淫らに揺らしてグボグボと音を立て、髪の前から汗の滴を飛ばして上下に跳ね踊る紗耶香。捻れる身体に腕を巻きつけ、左手を胸に、右手は股間に――。

ムギユッ！　ムギユムギユムギユッ！

犬の精液にぬめる乳房を押し上げながら揉み込むと、肌の裏側に溜まっていた疼きが一気に爆発。ぷっくり膨れ上がった乳首が狂おしく疼き、弾けんばかりに痼り勃つ。股間へ伸ばした手が和毛（にこげ）の茂みを隠し、細指は蜜を噴きこぼす花芯へ――ヌチュ！

「ンっ！　う、ンううっ！」

熱いぬめりを伝い、膺一杯に電流が渦巻いた。ヒクつく肉穴へ指をグリグリ沈めていくと、張り詰めたクリトリスが掌の下で潰れ、針のように鋭い悦感が閃く。

「ふぁうううっ！ あう、あう、あううっ！」

蕩けた花芯を掻き回し、掌で淫核を磨り潰して、狂おしい性欲を満たそうとする紗耶香。それだけでは足りず、弾む乳房を口まで押し上げて勃起乳首にムチュッと吸いつく。

ビッキインッ！

ふたつの肉豆の間に強烈な電流が走った。

弾かれて反り返ると、犯された肛門が男根に挟まれ、さらなる激感が炸裂する。

快感の波状攻撃に跳ね踊る身体。

次々と閃く稲光に追い立てられて遙かな高みへ一気に飛翔し——ない。

「ンあ、ううっ!? やあ、やうあああっ!?」

気が遠くなるほどの悦びに煽られているというのに、指では届かない膺奥がジクジク疼くばかりで、すべてが吹き飛ぶあの瞬間はいつまで経ってもやってこなかった。

（イきたいのに、イきたいのにいいっ！）

蜜壺の中に膨れ上がるのは、いやらしく潤んだ細かいヒダヒダの間を炎のヘビが泳ぎ回っているような、狂おしく焦れたい感覚。

「ひううううっ！ 挿入て、挿入て、挿入てよおおおっ！」

疼く乳首を甘噛みし、弾けんばかりに膨れ上がった淫核を夢中で捏ね潰しながら叫ぶと、
「よしよし、ようやく正直になったな」

ニンマリと笑った津山が、淫らに悶える女忍者の正面に跪いた。猛々しくそそり勃った肉棒に手を添え、赤々と輝く切っ先を肉アケビに――くちゅ！

くちゅ、ちゅ、ちゅっ！

「あうっ!?」

硬い亀頭に磨り潰された粘膜花卉に、甘い痺れが湧き上がった。むくれた肉瘤の切っ先が膣口にクポッとはまると、浮き足立った膣膜が早々と奮い立つ。

（い、挿入てえっ！ 早く、早く早く、もっと奥までねじ込んでえっ！）

ぶじゅじゅ……コポ、コポポ！

弛んだ花芯から噴き出す、粘る愛液、濃密な淫香。真っ赤に染まり、ゼリーのようにヌメヌメ光る肉ビラが、鶏冠のように波打つ縁を震わせていやらしく咲きこぼれる。

「なんだ、挿入る前からグチュグチュじゃないか」

苦笑した津山が、くねる紗耶香の腰に手を回し、掬い上げるように腰を動かした。

ぐじゅ、じゅ……じゅじゅ、にゅぬぬ！

繊細な壺口をしごく、灼けた鉄棒のように熱い男根。尻孔を犯されて狭まった淫穴に、それはあまりに太く、硬かった。

「は、うううっ!? 入って、く、るううっ!」

磨り潰された膣粘膜に凄まじい電流が次々と弾け、仰け反った身体が雷に打たれたようにビクビクと痙攣。仰向いた口は声にならない悲鳴を上げ、弾む乳房の先では真っ赤に膨れた乳首がいまにもなにかを噴き出しそうなくらい張り詰める。

「おお、ヌルヌルした粘膜が絡みついてくるぞ。男に慣れた穴だな」

「ひ、う、くう……っ!」

ただでさえ敏感な膣膜は、長い間お預けされていたせいでさらに感度を増していた。二本の肉棒に挟まれた粘膜隔壁に甘い炎が噴き上がり、しごきまくられた膣襞には電流が渦巻く。太さに引き伸ばされた括約筋を駆け巡る、心地よい痺れ。恥丘と尻房が裏から炙られているように熱くなり、腰骨が蕩けそうなほど気持ちよくなつて――。

「双孔を犯されて、どんな気分だ?」

「ふあっ!? ああ、ううっ!」

グチュングチュングチュン!

半ばほど潜り込んだ肉棒が激しく動き、蜜まみれの肉壺が荒々しく搔き混ぜられた。揉み捏ねられた粘膜壁に凄まじい悦びが激発し、眩い稲光が脳天を突き抜けていく。

「なにをよがってやがる。津山様のお尋ねだぞ、早く答えろ」

仰向けに横たわって紗耶香の尻を犯した男が、掴んでいた細い手首を離し、くねる腰を

掴んで腰を突き上げ始めた。前後の肉穴に次々と、凄まじい電撃が炸裂する。

「い、イイッ！ お尻も、オマ○コも、イイッ！」

弾かれたように伸び上がり、津山の首にしがみつく紗耶香。腰が浮き、淫棒が半分ほど抜け出して、ふたつの肉穴がグポポッと捲れ返った。繊細な粘膜隔壁が熱い亀頭に挟まれ、揉みくちやにされて、頭の中が真っ白になる。

ぎゅ、ぎゅ、むぎゅぎゅっ！

火照った乳房が男の厚い胸板に擦れ、押し潰された。柔肉にめり込む乳首に凄まじいスパークが弾け、ポニーテールを揺らして仰け反る紗耶香。穴だらけの薄布の下では汗ばんだ乳谷が擦れ合い、火照った柔肉が互いを揉み込んで悦びを高め合う。

（うう、動くううっ！ 身体が、勝手にいい、うごい、ちゃ……うううっ！）

閃く肉悦に煽られて、男の首にぶら下がった身体が上下に跳ねた。貫かれた双穴がグポグポ鳴り、突きまぐられた肉奥には熱いモノが炸裂。弾かれて伸び上がれば乳房が潰れ、

「ふあう、あう、あうううっ！」

湧き上がる悦びに操られて夢中で擦りつけてしまう。

「そんなにオチンチンが好きなのか？ そら、ここにもあるぞ」

グムニュ、と頬に突きつけられる真っ赤な亀頭。汗の滴に濡れるうなじにも、紅く染まった耳朶にも、生温かな先走り汁が塗りつけられた。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>